

<随想・私たちと教育>教育は死んだ!

著者	成清 良孝
雑誌名	日本文学誌要
巻	48
ページ	107-108
発行年	1993-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019698

教育は死んだ！

成 清 良 孝

昭和三十三年頃、わたしは「共悦」という郷里の先輩が出していた小さな個人雑誌に、四百字詰原稿用紙四枚ほどのエッセーを寄稿している。

当時評判だったW・H・ホワイトの『組織人』(The organization man)を紹介しながら、現代社会があらゆる分野で管理体制をますます強めていく中で、人間が主体性を喪失してしまい、その結果、生き甲斐とか、おのれの存在感とか、きわめて希薄になっている状況を慨嘆しているものだ。

寄らば大樹の陰とやらで、給料もよく、倒産の危険も少ない大企業に勤めるエリート・サラリーマンが、おのれの真の生き甲斐を求めて、片田舎の木工場の職人見習いになったり、山小屋の住人になったりするケースが、これまでいくつか、一種の驚きをもって報じられたことがあった。

会社の組織が巨大になりすぎて、その中の一員としてのおのれの位置づけや意味が実感できないむなしさ、ということであろう。このことは、すでに一九三六年(昭和十一年)にもチャップリンが映画『モダン・タイムス』で鋭く問題提起している。

わたしは幸か不幸か、職業としては東京都公立学校教員の体験しかないが、学校も組織体の一つであることは確かで、さまざまな枠組みによって、二重三重に取り囲まれている。

その一つは文部省——都道府県教育委員会——市町村教育委員会という強力な縦割りの管理体制である。

それが最近、ますます締めつけがきびしくなって、学校現場に自由^{かたたら}達さがなくなり、息苦しくなってきた。勤務時間も指導内容も常に拘子^{しやくし}定規^{じょうぎ}を押しつけられる感じで、そっちの方へいたずらに神経を使わざるを得ない状態がつづいている。わずらわしいこと、この上ない。

都立高校に戦後からずっと定着している制度に週一日の自宅研修日というのがあるが、文部省や一部の都議会議員が寄ってたかって、この十年間に何度も廃止しようとした。

週一日の自宅研修日が、いろいろな意味でどれほど日常の教育活動にプラスになっているか、はかり知れないものがある。それでも生徒指導その他で、むずかしい問題が起きた場合、どの学校も研修日を返上して、問題解決にあたってきた。教員にもそれくらいの良識はある。

定期考査はたいい午前中で終了する。答案が出てくれば、それを学校に居残って採点しても、自宅でも、以前は勝手たるべしだった。答案がまた出ない場合は、図書館や講演会や美術展などへ出かけるのも自由だった。日頃はできない立派な研修だからである。

それが最近、定期考査中に、教育庁の役人が抜き打ちに、勤務時間をきちんと守っているか、査察にくる。どういう大義名分があるのか、いちどじっくり聞いてみたいものだ。

それなら、狡猾^{こうかつ}にも雀の涙ほどの教員特別手当などでごまかさない

いで、きちんと残業手当でも出すようにしたらどうか。

職員会議が夜の十時、十一時にまで長びく場合もざらであるし、問題を起こした生徒をめぐって、連日夜十一時過ぎまで対策を話しあっている事例も枚挙にいとまがない。

ある知人は、夜中にふと目覚めて、教材で疑問になっていた箇所が気になって眠れず、とうとう起き出して調べ始め、決着は暁闇になった、という話も聞いた。

又、別の知人は、教材研究のための参考文献を、毎月数万円も購入している。完全に損得勘定を度外視している。給料に見合う段階に踏みとどまることができないこの教員気質を、査察にくる役人はきつと、

「バカなやつだ」

と、侮蔑しているに違いない。

教育の本質や実情が何もわからない愚昧な人間どもと、その地域選出の都議会議員の俗受けのスタンド・プレーとが結びついて、教員の本質的にフレックス・タイム勤務のありようを、薄汚い貧乏性よろしくつついている、という構図は決定的はずれではあるまい。議員は選挙民の感情的なクレームに弱い。役人は議員の理不尽な要求に弱い。

かくして、角を矯めて牛を殺す構図が随所に展開する。まさに「教育は死んだ」に向けて、急ピッチに加速されている。

教育の活性化は、教員に主体性を持たせることがいけば大切なこと。教員を奇妙な形で管理することでは決してない。

※

※

主題分裂は覚悟の上で、新しい指導要領に少しでも触れないと、この雑誌の立場上、羊頭狗肉に与することになる。

これまで小学校、中学校と新しい指導要領が段階的に実施されてきたが、来年度（一九九四年）から、高等学校も新しい指導要領に従って、新一年から実施の運びになる。

しかし、わたしには新しい指導要領が、本質的にどこが変わったか、よくわからない。かつて東京都の指導主事をつとめ、都立高校の校長、定年後は東京女子体育大学教授もつとめられた古矢弘氏は、生前よく「国語教育さざ波論」なるものを開陳されていた。

戦後四十八年、指導要領は何度か大きな改訂を経てきた。それに従って国語教育の分野も、それに合わせてアクセントや目玉を無理に？押し出してきた。その都度、しみったれた出世を考えているお先棒かつぎどもが、「先導試行」とかいって、軽薄なはしゃぎを演じてきた。

しかし、指導要領の改訂は、水面にほんのさざ波をたてるだけで、国語教育の本質的な流れはほとんど変わらない。

指導要領改訂のプロセスを聞くと、中央教育課程審議会や臨時教育審議会で、教育現場のことを何にもわからない委員が、いいかげんな思いつきで発言したことが、指導要領に具現化していく。たとえば、「いまの若者は手紙一本書けない」「今の子供は敬語の使い方知らない」などなどである。

今の五十代、六十代の人たちが、ちゃんと手紙を書けるのか、正しい敬語表現ができるのか。今の若い人と五十歩百歩だ。目糞が鼻糞を笑っている。滑稽なピエロを演じている人たち。

現在、脳と言語とのメカニズムの解明が急ピッチで進んでいる、という。これが学問的に明確となり、国語教育と結びつく時こそ、国語の指導要領が根底から変わる時であろう。

（なりきよ よしたか・一九五六年卒）